

教育課程編成委員会

記録者 高橋正行

1. 日時 令和5年2月28日(火) 17:00～19:00
2. 場所 新館5A教室
3. 出席者 内部委員（敬称略） 工藤佑輝、池田昌央、阿見芳明、境田三由紀、星野丈二、高橋正行
外部委員（敬称略） 吉田三晃、吉田昌央、石井孝治、竹野内宏明、永井良幸、石川真樹

【分科会（17:00～18:00）】

1. 令和4年度カリキュラムの振り返り：各役職者
 - （1）令和4年度の各学科教育方針の説明
 - （2）カリキュラム改善に向けての意見交換

■理容科

- 池田委員： 理容科のキャリア教育は、①入学前教育プログラム ②初年次教育プログラム ③産学連携キャリア教育プログラムと、3つの柱で編成している。
学生の気質が多様化・多層化している今、これらの内容について、委員諸兄のサロンスタッフ教育の事例を含め、アドバイスを頂戴したい。
- 吉田(三)委員： 今の若い人は自己中心的あるいは利己的な傾向が強くなっているように感じている。
そうした人々の心に言葉が届くようにするには、指導内容を「おしつけ」的に伝えるのではなく、「共感」してもらうために指導内容や伝え方を工夫することがとても重要だと考えている。
- 池田委員： 具体的にどのような工夫をしているのか。
- 吉田(三)委員： スタッフをよく観察し、「何が問題なのか」、実態を見極めるように努めている。
アプローチ方法としては、
① 危機感を煽る、②感動させ、綺麗な心（素直な心）になってから伝える、という2つのステップを踏むことを意識している。
伝えたいことをダイレクトに伝えても、理解しようとするどころか、むしろ拒絶されてしまうリスクもある。
そうならないようにするためには、心の壁を『感動』で壊すことを優先している。
具体的には、感動系の動画や実話を元にしたドキュメンタリー映画を教材として使用している。
- 吉田(昌)委員： 学生、あるいは社会経験の少ないスタッフから成熟した社会人へと成長して

いくためには、人生観、価値観を根本的に転換しなければならないと自分は考えている。

それまでの人生経験の延長線上では実社会を生き抜いていけない、そのことをどのように伝えるか、ここが重要だと思う。

一番インパクトを与えられるのは、本物を見ること、一流に触れること、「リアル」を感じること、それらの点にあると自分は考えている。

理容業界に限る必要はない。異業種の一から学ぶ機会を作ったかどうか。

仕事に向き合う姿勢、プロとしての意識や考え方、一流の立ち居振舞いや所作を、職種を越えて学ぶことができるはず。

■美容科

阿見委員： 選択授業の一つであるヘアデザインコースでは、ヘアデザインの構成力を高めることを目的として、今年度から展開図（ダイアグラム）の学習を導入した。この結果について委員諸兄のご意見を伺いたい。

竹野内委員： 授業開始時点（10月）での学生のカット技術習熟度（技術レベル）により指導内容は変わる。サロンのスタイリストレベルなら十分理解できる内容だと思うが、学生となると内容を再検討するべきだと考える。基本的な内容を考慮したうえでブラッシュアップしていこう。

石井委員： 当社では、ダイアグラムは理解が難しいのであまり教えていない。人により教育効果が異なると考えている。実際、頭より体で覚えるタイプには受け入れづらい傾向がある。この学校では在学中にダイアグラムを学び、習得をチャレンジしていることに驚いている。

阿見委員： ダイアグラムの学習内容については、引き続きご意見を賜りたい。続いて、キャリア教育の実施内容と成果について報告する。形態の違うサロン（企業）を招き、展示授業を6回実施した。その目的は以下の3つである。

- ① 「本校で学ぶ目的」を明確に言語化
- ② 確かな職業観・人生観の育成
- ③ 社会で必要なスキルの把握と将来設計

学生たちは、その時期が迫ってこないと自分事として就職を考えようとしなない。ここが問題だと考えている。

石井委員： 学生によっては入学した目的が違うので、受け入れ方（理解度）に違いがあって当然ではないか。招待したサロンの選択基準には異議はないが、学校の就職支援の組み立て方や実施時期については検討の余地があると思う。また、学生アンケートを実施して学びの状況や傾向を分析することが必要だと思う。

■ビューティーアーティスト科

星野委員： 今年度のフォトコンテストは9名の入賞者と良好な実績を残すことができた。

その理由の一つとして、3タイプのメイク担当教員として現役の業界人を招いていたことは大きいと考えている。

特殊メイク技術者、海外のメイクアップアーティスト経験者、化粧品メーカーのインストラクターの3名による授業を、フォトコンテスト作品づくりも視野に入れた授業を実施している。

色彩検定の取得率については、全国平均を少し上回る結果となった。

学生のモチベーションアップ（指導方法）にさらなる改善が必要と感じている。

石川委員：色彩検定は、昨年に引き続き、高得点層と低得点層がはっきり分かれている。実技系検定の取得率は高いので、その点は評価しつつ、知識系検定取得に対するモチベーションを高める方法を考えていこう。

星野委員：次年度以降、小さな成功体験の積み重ねを学生に実感してもらうことを目的とした「検定対策小テスト」を実施し、やればできるという自己効力感を高めていきたい。また、習熟度別の補習を実施し、個別最適な指導を行なう。

同時に学生への動機づけとして、各種検定に関わる業界関連の方々によるデモンストレーションを関連科目の初回授業で実施することも計画している。

石川委員：昨今の新入生はコロナ禍の影響で、高校在学中、学校行事によるクラス・学年を越えた共同的な体験学習が不足しており、同時にまた、オンライン授業や分散登校という学修生活の結果、仲間と学び合う体験も不足している。

この結果、学ぶことに対してどこか受け身なところがあるように感じている。教員によるモチベーションアップの意義は極めて高く、その優先順位は高いと考える。

前回の委員会（分科会）でも話したとおり、指導者側の“熱意ある姿勢”を大切にしていきたい。

学年も後期の今、学生の学習態度と学習意欲も高まりつつある。今後は指導者側と学生たちのコミュニケーションを大切にしていきたい。

■ビジネス美容科

境田委員：本年度の教育目標である『ルーブリック評価を活用した学外実習』の結果がどうであったか、学生の作成した実習日誌（所感）を見ていただき、ご意見を頂戴したい。

永井委員：実習現場での気づきと、それを普段の学生生活に活かそうと考えているのが詳しく書かれていると思う。学生は確実に成長していると思う。

自己評価項目記入のための考察により、自分を客観視することができ、課題が明確になると思う。今後の目標も立てやすくなるはず。

この実習日誌の記入方法について提案したい。「指導担当者からのコメント」の欄は、その日のうちに実習指導者が記入するのがベストだと思うが、時間がとれないときもある。

そこで、例えば、フォーマットをオンライン化すれば、どこにいてもスマホで

入力可能となる。効率的なフィードバック方法を考えていただきたい。

境田委員： 学内の実習授業でもルーブリック評価を活用した結果、学生は目標を明確に設定できるようになり、モチベーションも上がった。事実、後期の学科・実技試験の結果は良好だった。

永井委員： 目に見える達成感があると、学生は自分がやるべき事が分かり、安心するのではないか。

今年度だけに限らず、次年度の実施結果と合わせて分析することでルーブリック評価の活用方法がより具体的になると思う。

境田委員： 今年は、食事管理や実際の運動方法、そして解剖生理学などを総合的に学び、自分自身でダイエット方法を考察する力と、学生一人一人が知識や技能を総合的に活用できる力を身につけることを目標としたカリキュラム編成となっている。

永井委員： そのことにより間違いなく知識は増えるだろう。実際に自分の体で体感し、効果を実感することは大きな気づきがある。

この学習経験から学んだ知識技能は、卒業後といわず、在学中の来客実習でも、お客様の施術計画を立てる際にも役立つと思う。

【全体会（18：10～18：30）】

1. 閉会挨拶（校長）

学校運営の基本方針である「教育の質保証」の実現のため、今年度は以下の9つのテーマを持って取り組んできた。

- (1) 安定した資格・検定合格率の実現を可能とする教育プログラムの構築
- (2) 計画的でオープンな就職指導
- (3) D P（卒業認定・学位授与の方針）に沿った教育課程
- (4) 教職員の質向上（職員研修の強化・改善）
- (5) 産業界との公益的な連携
- (6) 外郭団体（後援会、育友会、校友会）との連携強化
- (7) E M（Enrollment Management）委員会の設置
- (8) 進学ミスマッチ、就職ミスマッチの解消を目的した各種データ収集
- (9) 横断的な運営チームの発足

上記を継続しつつ、さらに次年度は『地域・業界・企業と連携した授業』を取り組みたい。また、異業種（サービス業、製造業、金融業など）の多様な職種のプロに協力を得て、「仕事について学ぶ」機会を設けることも企画している。

資格取得が主要な教育目的ではなく、実社会で活躍する人材育成を目的としたカリキュラム開発にむけ、今後とも忌憚のないご意見を頂戴したい。

以上